様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４１４４

研究課題名（和文）集合的記憶論とトラウマ記憶論の接合可能性の探究――記憶研究の学際的展開に向けて

研究課題名（英文）Exploring Collective and Traumatic Memories: A Theoretical Investigation

研究代表者
直野　章子（Naono, Akiko）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：１０４０４０１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会学と歴史学および精神分析学における記憶研究の認識論、理論・方法論的な課題を精査しながら、集合的記憶論と精神分析学的なトラウマ記憶論の有機的接合の可能性を探ることを目的とし、1990年代から2010年代までの間に刊行された集合的記憶とトラウマ記憶に関わる主要な理論と経験的研究を検討した。トラウマ的な過去の実在性を確保するうえで精神分析学の洞察と社会学や歴史学の経験的研究を接合することは難しいが、トラウマ記憶であっても集合的記憶に影響を受けながら形成されていることを示し、精神分析学的なトラウマ記憶論と社会学的な集合的記憶論の接合可能性を見いだすことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
記憶研究が歴史学や社会学の経験的研究と精神分析学研究とに分岐している現状において、集合的記憶論と精神分析学的なトラウマ記憶論の有機的接合可能性を示すことで、記憶研究の新たな展開の可能性を示唆することができた。また、トラウマの生存者が自己を再構築するうえで、過去に意味を与えることの重要性を指摘する精神分析学や心理学の知見を集合的記憶論と接合した結果、集合的記憶の在り方によって、傷を負った主体が自己を再構築するのを助けたり、困難にしたりすることを明らかにし、当事者以外の社会の構成員が果たしうる役割を示唆することができた。

研究成果の概要（英文）：This research aims at exploring the potential for integration of collective memory theory and psychoanalytic trauma memory theory, critically examining the epistemology, theoretical and methodological issues in memory studies within sociology, history, and psychoanalysis. It reviewed major theories and empirical research related to collective memory and trauma memory published from the 1990s to the 2010s. It is challenging to combine psychoanalytic insights and empirical research from sociology and history to affirm the reality of a traumatic past. However, we confirmed that even traumatic memories are formed under the influence of collective memory, demonstrating the possibility of integrating psychoanalytic theory of traumatic memory and sociological theory on collective memory.

研究分野：社会学

キーワード：集合的記憶　トラウマ　歴史と記憶　精神分析学　生存者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

言語論的転回と呼ばれる知的潮流のなかで形成された人文社会学系の記憶研究は、記憶の構築性、可変性、遡及性を強調してきた。集合的記憶論は、現在の記憶行為の社会的意味を問う知識社会学や、過去の解釈をめぐる集団間の闘争に焦点を当てた「記憶の政治学」としての研究が多く、トラウマを論じる研究は、体験の固有性や真正性を示唆する概念として「記憶」を用いながら、「被害者」の証言を出来事の真正な根拠として扱う傾向が近年強まっている。他方、過去の存在論的地位の不確定性や主体の被傷性を示唆し、近代科学の認識論や近代的主体観に挑戦した精神分析学の記憶理論は、経験的研究のなかで等閑視されている。記憶概念が脚光を浴び始めた 1980 年代に「トラウマ」（とりわけホロコースト）に関わる記憶が認識論的、存在論的な難問を突きつけたが、それに対する格闘が十分に継承・発展されないまま、歴史学や社会学の経験的研究と精神分析学研究とに分岐しているのが現状である。

２．研究の目的

本研究は、社会学と歴史学および精神分析学における記憶研究の認識論、理論・方法論的な課題を精査しながら、集合的記憶論と精神分析学的なトラウマ記憶論の有機的接合の可能性を探ることを目的とした。さらに、研究成果発表や研究集会の開催を通して、記憶研究の新たな展開に寄与することを目指した。

３．研究の方法

1990 年代以降、2010 年代までの間に刊行された集合的記憶あるいはトラウマ記憶に関わる理論や実証研究のうち、主要なハンドブックや論集（*Routledge International Handbook of Memory Studies*, *Ashgate Research Companion to Memory Studies*, *The Collective Memory Reader*, *A Companion to Cultural Memory Studies*, *Interdisciplinary Handbook of Trauma and Culture* 等）に収録されたもの、記憶研究に特化した国際学会 Memory Studies Association 発行の国際誌 *Memory Studies* でレビューされた、あるいは引用が多いものを中心に、日本語で刊行された文献も含め、認識論、主体概念、歴史記述の可能性と困難に関わる論点を中心に精査した。

４．研究成果

（1）記憶を精神に印づけられた過去の痕跡と捉え、想起という行為を通して過去が発見されると考える記憶の「貯蔵庫モデル」は、プラトンに始まる（Schechtman 1994）。このモデルは「魂への刻印」から「脳への刻印」へのアップデートを経て、トラウマ記憶に関する文学理論や神経科学、精神医学や臨床心理学における一部の研究で引き継がれている。しかし、人文社会学系の記憶研究において主流なのは、記憶を現在における過去の再構成であると捉える「再構成モデル」である。何が想起され、忘却されるのかは、社会的、文化的な文脈によると考えるために、過去と思い出された記憶の内容との対応関係よりも、現存の社会集団にとっての過去の表象や認識を分析し、社会統合や闘争における機能の解明に力点を置く傾向が強い。主眼が置かれるのは現在であり、過去ではない。さらに、想起する現在において利用できる概念、知覚、分類のカテゴリーや語りによって過去は再構成されると捉えるために、記憶の指示対象である過去の実在性や事実性については、個別のケースで判断するか、判断を保留することに

なる。「再構成モデル」は、過去――特に、トラウマ的出来事の実在性――が問われているときには、時としてそれを否定する力になりかねない立場ともいえる。他方、「貯蔵庫モデル」はトラウマ記憶の事実性を確保する手助けとなり得るが、過去と想起される記憶内容との対応関係を前提に分析を進めることで、過去がどのように体験されたのか、そして、過去が今どのように体験されて、主体が何を試みているのかという、主体の心的な生（psychic life）の実態を見失うことにもつながる。

現在主義でもなく、素朴な過去の実在論でもない、記憶にアプローチする第三の道を示しているのが精神分析学の記憶論である。思い出された体験は、想起の時点において修正されたものであって、過去をありのままに映し出しているわけではないというフロイトの見解は、記憶の「再構成モデル」に該当する。しかし、記憶として現れる改ざんされた過去が、自由に捏造されたものだといっているわけではない。不快な印象の抑圧や代替という目的のために過去は修正されるのであって、事実と違っている範囲は限定的であるとフロイトはみており、歴史修正主義者のように、過去や記憶を意のままに書き換えることができるとは考えていない。さらに、いくつかの場面の置き換えや圧縮が生じたとしても、想起には過去の「本質的なもの」が含まれているとフロイトはみた。ただし、実際に起きたという意味における外的な現実だけでなく、心的現実を含む「本質的なもの」である。フロイトの仮説は、過去の実在性――少なくとも、何かが起こったという痕跡――を確保する手助けとなる。しかし、具体的な記憶の表現が、どのように主体の歴史を開示していくのか、そこにどのような「本質的なもの」が現れてくるのかは、個別のケースの分析を通して見るほかはなく、想起された場面や出来事が実際に起きたことなのか、それとも空想なのかを判断する一般的な基準はないため、歴史学や社会学の経験的研究に応用するのは困難である。

（2）過去の事実性の確定に関しては、精神分析学の洞察と社会学や歴史学の経験的研究を接合することは難しいが、トラウマ体験の記憶と主体の関係を探求するうえで、精神分析学的なトラウマ記憶論と社会学的な集合的記憶論の接合可能性を見いだすことができた。

トラウマをもたらした出来事やその記憶の性質ではなく、文化・社会的な記憶の枠組みの重要性に目を向けた人類学者ローレンス・カーメイヤーの論考（Kirmayer 1996）を手がかりに、アルバックスの集合的記憶論や精神分析学的な臨床的知見を検討した結果、トラウマ記憶のあり方と集合的記憶との関係、とりわけ、トラウマ記憶の主体が自己を再構築する可能性と集合的記憶との関係を明らかにすることができた。

アルバックスが論じるように、記憶の社会的な枠組みは個人的記憶の存立条件ともいえるところがある。それに欠ける場合は、自ら経験した過去であっても忘却することになりかねない。また、枠組みのありようによって、個人的記憶の内容や想起のされ方も変化する。

「あり得ない」と考えられている出来事――ホロコーストや原爆被爆のような極限的なものだけでなく、近親姦のようなタブー視されているもの――に遭遇した場合、既存の理解の枠組みの中で体験を受けとめることができなかったり、現実と空想の境界線が侵犯されるために、主体は心的麻痺状態に陥ったり、自我の崩壊や解離に直面する。体験を自己の歴史に統合して、自己を再構築するには、過去を現在と区別し、過去に意味が与えられなければならない。つまり、体験が記憶として獲得されなければならないのだ。ホロコーストや原爆被爆のように、集団的な記憶が形成され、生存者と連帯する公共的な空間が創出された場合、生存者は自己再構築の助けとなる記憶の獲得へと向かうことができる。しかし、幼児期の性的虐待のような、社会が認めたくない体験であれば、集合的記憶は形成されづらく、被害者自身が記憶をな

くしたり、過去を否認したり、沈黙へと追いやられたりすることになる。トラウマ記憶であっても、出来事にかかわる記憶の文化・社会的枠組み（集合的記憶）に影響を受けながら形成されるといえるのだ。

他方、集団の記憶の枠組みが個人の記憶を象ってはいるが、一方的にではない。想起や忘却という記憶行為の主体は、記憶の集合的枠組みを頼りにしつつも、自己の歴史を主体的に形成する。社会学者で精神分析の臨床家でもあるジェフリー・プレーガーがいうように、記憶とは、他者の住まう世界と自己との相互作用のなかで形作られるのであって、解釈する主体として、自己の関与があるのだ（Prager 1998）。想起という行為には、記憶の断片――そこには空想も含まれる――をつなぎ合わせて物語として差し出すという創造的なところがある。過去を思い出すことは、過去の再記述に留まるのではなく、他者との関係を組み替えたり、過去をやり直したりしながら、自己を再構築する主体的な行為も含まれるのだ。

（3）集合的記憶は、過去を想起する社会や文化の枠組みを提供することで、傷を負った主体が自己を再構築するのを助けたり、困難にしたりする。ただし、記憶の枠組みが一方的に主体の記憶を規定するわけではなく、想起において主体の関与があることも見逃してはならない。精神分析学の知見が示すように、そこには空想的な要素も入り混じっているが、記憶は確かに主体の歴史と現在を照らし出しており、主体に成り代わって、主体が忘れていた過去――外的現実も心的現実も――を伝えることもあるのである。

（4）本研究期間を通して、集合的記憶論と精神分析学的なトラウマ記憶論との接合可能性を示すことができた。また二度にわたる国内シンポジウムを開催することで、哲学、歴史学、精神分析学の専門家と、研究課題についての分野横断的な検討を行うことができ、その成果も発表することができた。さらに、トラウマ記憶にかかわる臨床と研究で知られる心理学者を米国から招聘して、それまで積み上げてきた理論的知見を具体的な事例に即して検討する国際シンポジウムを開催した。その成果は 2023 年度末に発表する予定である。記憶研究の国際的なネットワーク形成については、コロナ禍により対面での国際学会参加が叶わなかったために、今後の課題として残ったが、オンラインでの国際学会参加を通して、イラクの記憶研究者とのネットワークを作ることができた。

文献

Kirmayer, Laurense J. “Landscapes of Memory.” In *Tense Past : Cultural Essays in Trauma and Memory*, edited by Paul Antze and Michael Lambek, 173-198. London: Routledge, 1996.

Prager, Jeffrey. *Presenting the Past: Psychoanalysis and the Sociology of Misremembering*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998.

Schechtman, Marya. “The Truth About Memory.” *Philosophical Psychology* 7.1 (1994): 3-18.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 直野章子	４．巻 119
２．論文標題 小特集　「記憶の存在論と歴史の地平」に寄せて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文学報	６．最初と最後の頁 2、3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 直野章子	４．巻 119
２．論文標題 記憶を擁護する―「あり得ない出来事」の記憶を追いながら	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文学報	６．最初と最後の頁 5、30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Akiko Naono
２．発表標題 Traumatic Memory as Cultural Memory: A Socio-Historical Exploration of the Construction of Memory in the Atomic Bombing Survivors
３．学会等名 Memory Studies Association Fifth Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 直野章子
２．発表標題 社会運動と主体――フレーミング理論と言説分析の対話を通して
３．学会等名 第９０回日本社会学会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 直野章子
２．発表標題 原爆症認定訴訟における体験の記憶と政治
３．学会等名 京都大学人文科学研究所シンポジウム「証言／告白／愁訴――医療と司法における語りの現場から」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 直野章子
２．発表標題 「ありえない」出来事の行方――原爆の記憶と性暴力の記憶
３．学会等名 京都大学人文科学研究所共催・公開シンポジウム「抑圧されたものの痕跡を求めて ／辿って――記憶の存在論と歴史の地平II」
４．発表年 2020年

１．発表者名 直野章子
２．発表標題 「あなたの痛みが私を貫く――被爆の記憶の主体と境界」
３．学会等名 公開シンポジウム「記憶の存在論と歴史の地平」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 直野章子、西村 明ほか	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 258
３．書名 シリーズ戦争と社会5 変容する記憶と追悼	

１．著者名 田中雅一、松嶋健、立木康介、上尾真道、直野章子、樫村愛子、花田里欧子ほか	４．発行年 2018年
２．出版社 京都大学人文科学研究所	５．総ページ数 644
３．書名 トラウマを生きる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 記憶の存在論と歴史の地平 III （Ontology of Memory and the Horizon of History）	開催年 2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関